

NEWS

慶応ビジネススクールが「ヘルスケア」をテーマに国際フォーラム 「高齢化は医療費増の主要な推進因子ではない」

2014/3/19

千田敏之 = 医療局編集委員



慶応義塾大学ビジネス・スクール（KBS）をはじめ世界6カ国（日本、米国、フランス、ドイツ、中国、ブラジル）のビジネススクール6校から成る国際共同研究・教育のアライアンス「The Council on Business & Society（CoBS）」は、ヘルスケアをテーマとした国際フォーラム「Second Annual International Forum 2014 ~Health and Healthcare」を2014年3月6～7日に慶応義塾大学日吉キャンパスで開催、各国の医療政策や医療ビジネスの専門家が活発な議論を交わした。

健康経営はグローバル企業にとって大きな課題

議論されたテーマは3つ。1日目は「健康な従業員、健康な企業」で、健康経営をテーマにした講演やパネルディスカッションが行われた。基調講演を行ったマッキンゼー・アンド・カンパニー東京オフィスの上級共同経営者、アクセル・バウアー氏は、ドイツやインド、さらにはGEのようなグローバル企業の例を挙げて、世界における健康経営の潮流を紹介した。

また小社発行の『医療戦略の本質』のマイケル・E・ポーター氏との共著者、米国ダートマス大のエリザベス・オルムステッド・テイスバーグ氏も登壇、「従業員の健康維持・増進に企業が果たすべき役割は大きい。特にグローバル企業は健康プログラムに世界のどこの国でも取り組む必要がある。それが企業活動の効率を向上

させ、企業価値も高める」と述べた。その後の分科会「従業員の健康戦略の実行」では、日立製作所が作った減量プログラムの内容と成果や、米国のヘルスケアIT企業、サーナー（Cerner）社が従業員向けに提供している様々な健康プログラムが紹介された。

ヘルスケア分野の技術革新に期待

2日目午前中のテーマは「ヘルスケアにおける技術革新と経営革新」で、医療業界や各国の大学から招かれたスピーカーが登壇した。基調講演には、ドイツSAP社でヘルスケア分野のシニア・インダストリー・アドバイザーを務めるマーチン・バーガー氏が登壇。ソフトウェア企業の立場から、技術はヘルスケアに対して、改善（improvement）/解析（analysis）/効率（efficiency）という三つの側面から貢献できると話した。

基調講演後のパネルディスカッションでは、バーガー氏に加え、製薬大手の米ファイザー社や電子カルテ大手の米サーナー社の担当者などがパネリストとして参加した。テーマは「技術や経営、ビジネスモデルの変化はヘルスケア産業をどのように変えるか」。ファイザー社の担当者はこの中で、個人の遺伝情報や体質に基づく医療（個別化医療）の課題を指摘した。現状では診断コストが高いために限られた患者しか恩恵を受けられていないとし、今後のコスト低減の必要性を説いた。

その後の分科会「ヘルスケア産業の最先端技術を活かすには」には筑波大学のマルチン・ポール氏が登壇した。ポール氏が指摘したのは、日本が世界で最も高齢化が進んだ国であり、ヘルスケアの重要性がとりわけ高いこと。その上で、筑波市を拠点とするヘルスケア分野の取り組みを紹介した。筑波大学附属病院で実施中の完全ペーパーレスのEHR（electric health record）や、アレルギー患者とその家族向けの情報ネットワーク「Tsukuba-Pediatric Allergy Network（T-PAN）」、CYBERDYNEの装着型ロボット「ロボットスーツHAL」を試用できる「CYBERDYNE studio」などを紹介した。

「高齢化は医療費増の主要な推進要因ではない」でコンセンサス

2日目午後の最後のテーマは「ヘルスケアマネジメントにおける課題：ヘルスケアのコスト負担は誰が負うべきか？その提供方法は？」で、各国が抱えるヘルスケア政策の課題について議論が行われた。基調講演に立ったOECDで医療経済政策を担当する村上友紀氏（写真中央）は、OECD各国の医療財政の状況を示した上で「高齢化そのものは医療費増の主要な推進要因ではない。むしろ、医療の技術革新や、政策、規制などが主因と言える」と述べ、より効率的な医療提供の確立や、民間からの財源確保に力を入れるべきだと強調した。

その後に行われた分科会「利害関係者の役割：全権は患者にあるべきか？」で

は、患者の果たす役割について議論された。日経メディカルのコラムでもお馴染みのメディファーム社長で医師でもある裴英洙氏はこの中で、「日経ヘルスケア」2010年10月号の「患者1000人大調査 私が「ファン」になった診療所」の調査結果を示しながら講演、「この調査で、患者はより緊密な医師とのコミュニケーションを求めていることがわかった。コミュニケーションは医療の中の重要な要素。患者は医師のコミュニケーション能力を改善する“先生”の役割を果たすことができる」と語り、医療提供システムの中で患者が担える新たな機能を示唆した。

© 2006-2014 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.